

W. Raabe „Stopfkuchen“ 論

— 語りの仕組みと読者の立場(3) —

大塚 讓

《第四章》 語りのトリック

W. Raabe のこの小説¹⁾ほど、作者が読者²⁾を騙しからかい試すことに情熱を傾けている作品も珍しい。そのための手管の根幹は、作中人物 Ich を語り手 Ich と錯覚させることにある。この錯覚の成立に最も大きく関与しているのが、「時間」の仕掛けだ。SE, BE, EE, という三つの時間レベル³⁾が、通常のように SE を定点として遠近法的に結合されずに、並立する三つの現在として再現される。この仕掛けが見抜けずそこに遠近法を前提してしまう時、作中人物 Ich を語り手 Ich と誤認することは避けがたいものになる。本稿第一章—第三章⁴⁾では、この手記という体裁を採った作品において秘かに「再現」という技法が用いられていること、従って語り手 Ich と思しき人物が実は登場人物 Ich にすぎないことを明らかにすることによって、作者が読者を陥れるために用いているらしい手管の根幹を闡明したつもりである。

しかし、これは、一旦騙された上での慎重な再考のみが能くする作業であっ

- 1) テキストは、Wilhelm Raabe, *Sämtliche Werke Braunschweiger Ausgabe* (Göttingen, Vandenhoeck & Ruprecht, 1969) B. 18.
- 2) この作品における作者の読者に対する意識、またこの作品を書いた当時の作者の対読者意識についての総括的考察は次章に譲る。
- 3) この三つの時間レベルについては、拙稿：W. Raabe „Stopfkuchen“ 論—語りの仕組みと読者の立場(1) (小樽商科大学人文研究第64輯1982年10月) 第一章 S. 119-123を参照されたい。
- 4) 第一章—第二章は小樽商科大学人文研究第64輯(1982年10月) S. 117-139に、第三章は同第66輯(1983年8月) S. 45-62にそれぞれ掲載された。

て、ひとたびの誤読は避け難いところであろう。本章ではこれまでの作業を踏まえながら、作者が読者を誤読へ誘動するために用意したいくつかのトリックとそれらによって成立するはずの誤読のプロセスを具体的に考察する。手の込んだ時間的技法に基づいて作中人物 Ich を Ich-Erzähler と思い込ませることが、これらのトリックの根幹をなすことは言うまでもない。このトリックによって、読者は Ich である作中人物 Eduard の無知な視点に囲い込まれる。しかもなお、作者は狡猾にも、読者にあらかじめいわゆる「殺人事件」へのあらぬ関心を吹き込んでおく。面白い「事件」への誤った期待を抱き無知な視点に取り込まれた読者は、さんざん焦らされた挙句につまらない事件を差し出されて、ようやく作家によって一杯食わされたことを知る。ここで初めて、読者はこの作品全体が挙げて自分を誤読へ導くために仕組まれたものであることに思い至る⁵⁾。我々はまず、読者の関心を「事件」の方へ誘動する手口の検討から着手してみよう。

(一) 基本的メカニズム

「ひとりの少年が、毎日自転車の荷台に大きな砂袋をつんで、メキシコの砂金採集所の近くから、国境を越えてアメリカに入国します。とうぜん、税関の役人があやしんで、砂袋をあけてみます。ところが袋の中はただの砂が入っているだけです。役人たちが今日こそはと袋を毎日徹底的に調べるのですが、何ひとつ発見できません。少年はいったい何をどうやって密輸したのでしょうか。(中略)

メキシコの砂金、砂袋、密輸という言葉が並べられると、私たちはいつのまにか、どうやって少年は砂金を密輸したのか、とつい考えてしまいます。そう思い込ませるように問題がたくみにつくられているのです。少年は何ひとつかくしていないのです。少年が密輸していたのは、じつは自転車だった

5) ここにおいて、《作者対読者》というこの小説の根本モチーフが読者にはっきりと意識化されてくるはずだ。

のです」⁶⁾。

これは、奇術や推理小説において、「あざやかな意外性」⁷⁾を生み出すために、人の陥りやすい「先入見を巧みに利用」⁸⁾する「だましのテクニック」⁹⁾、すなわちトリックの有力な補助手段であるいわゆるミスディレクション（ドイツ語では Irreführung ないしは Irreleitung）を説明する恰好の例として挙げられたものである。我が „Stopfkuchen“ においても、読者を騙すためのミスディレクションがふんだんに使われている。ただし、その使われ方のメカニズムはかなり手が込んでおり、また騙しの向こう側に待ち受けているのは、意表外に出るものには違いないにしても、非日常的意外性とは全く裏腹のものではあるが。

この小説における第一のミスディレクションは、犯罪小説風の偽装である。このためにいくつかの小道具が使われているが、なかでも最も重要なのはこの小説の副題であろう。開巻劈頭、Stopfkuchen というお菓子の名前のような奇妙な主題の下に、いかにも海洋での殺人事件を匂わせる Eine See-und Mordgeschichte なる副題が添えられている。読者の小説全体への関心をより具体的により強力に方向づけるのは、あきらかにこの副題の方だろう。これを見て、読者が例えばスリルとサスペンス溢れる犯罪事件を思い描いたとする。おそらく、そう期待するのが普通だろう。しかし、その時読者は、誤った先入見へ導く二重のミスディレクションの手に落ちている。もう一度注意して副題を見てみると、「海洋での殺人事件」（例えば Eine Mordgeschichte auf (hoher) See）などとはなっておらず、Eine See-und Mordgeschichte (Bindestrich (ハイフン) を踏まえて厳密に訳せば「海洋物語と殺人物語」と二つの物語が並置されていて、See が Mordgeschichte の意味を限定してはいないことに気付くはずだ。事実、小説の中で海と殺人事件とは何のかか

6) 松田道弘著『とりっくものがたり』(筑摩書房1979年)4ページ。

7) 上掲書5ページ。

8) 同上

9) 同上

わりも持たない。それだけではない。たしかに小説の中で殺人事件が扱われているが、犯罪小説や推理小説の面白さを少しでも知っている読者にはあまりにも貧弱でつまらない事件が、それも小説のほとんど最後の部分（全207ページ中の S. 185から S. 193まで）に、Stopfkuchen の一人語りとして挿入されているにすぎない。つまり、この小説は、「海洋での殺人物語」でないのはもとよりのこと、言うところの「殺人物語」ですらないのである¹⁰⁾。

ともあれ、読者はこの少々度を過ぎた二重のミスディレクションに誘動されて、面白い殺人事件へのあらぬ期待を抱きつつ小説の中へと導き入れられることになる。だが副題に仕組まれたこのミスディレクションは、S. 49を過ぎたあたりでその役割の一部を果し終える。読者はすでに、この小説で言う「海洋」とは、単に、書き手 Eduard がごくたまに BE の回想から我に帰ったその序に物した船上の様子の寸描にすぎず、殺人事件とはそもそも何のかかわりもなさそうであることを知り始めているはずであるから。とは言っても、これによって、たしかに読者の「海洋での殺人事件」への期待はみごとに肩すかしを食わされはするものの、「殺人事件」そのものへの期待はまだ衰えてはいないと思われる。というのは、読者の「犯罪」への興味を繋ぎ止めておくための小道具が、小説中のあちこちにそれなりに効果的に配されているからだ。それらの小道具類を少し点検してみよう。

S. 60 で、船上の書き手 Eduard が、もし自分が今書いている「Stopfkuchen 犯罪事件」(Kriminalgeschichte Stopfkuchen) の一節を朗読して聞かせれば、同乗の船客たちは自分のことをさぞかしバカな男よと思うにちがいない、と言っている。彼は、赤の砦での昼食について船の上で細々と書いている自分自身が少々滑稽に思われて、このようにちょっと照れているらしいが、その際「Stopfkuchen 犯罪事件」という言葉を用いている点に留意する必要がある。

10) 少し結論めいた言い方をすれば、この小説は、読者のいわゆる「犯罪事件」への通俗的（と作者は考えたようだ。これについては注46）参照）関心そのものを、そしてさらには、それをも含む水平的、遠心的（総じて空間的）な思惟のあり方一般を焦らし一杯食らわせてからかうことを狙っているように思われる。詳しくは次章参照のこと。

この小説では、Stopfkuchen はもとより書き手の Eduard を含む小説の全構成要素が、読者を騙しからかい試すために動員されていることは、例えば、先に見たように、副題¹¹⁾を少し検討すればわかることだが、手記を書いているのは船上の Eduard なのだから、彼こそが最っとも多く作家の意を体した存在であるとも言えよう。ここでも、彼は先の言葉によって、犯罪事件の登場を痺れをきらして待ち受けている読者の気を少し引いておこうという魂胆らしい。

読者は、事件らしい事件の到来を今や遅しと待ちくたびれながら、もう一方では、こころまで読み進めば、この小説で言う事件とは、どうやら、先代の赤の岩の主、農夫 Quakatz が嫌疑を掛けられた Kienbaum 殺しの一件らしい、と思いはじめているはずだ。それもそのはずで、丹念に調べてみると、読者の関心を徐々にこの事件へ引き寄せるためのミスディレクションが、実に巧妙に仕掛けられているのがわかってくる。まず、EE (BE の Eduard による回想) において、少年の Stopfkuchen が、Quakatz のように「Kienbaum を殺してもいないのにそう見なされるよりも」¹²⁾ 学校での劣等生としての自分の境遇の方がはるかにひどい、と言っているのが注目される。作者は、Quakatz が謂れない嫌疑を受けていることをこういう形で暗示することによって、語り手不在の欠を補っているわけだ。後に見るように、「犯人は誰か？」式の発想法そのものにしっぺ返しを食らわせることを狙っているこの小説において、この種の発想法を刺激する上の暗示は、すでに一個のミスディレクションとしての効果をもっている。

この〈Quakatz = 無実〉の暗示と相手を携えて読者の関心を「Kienbaum 殺害事件」の方へ導く効果を発揮しているのが、すでに第二章において別の角度から検討した、例の頻出する Kienbaumsmörder (Kienbaum の殺害者) 等の表現である¹³⁾。読者に与えられるこの事件についての知識は、S. 162以後

11) この手記が備忘のために認められた私的なものであることを立前としている以上、この副題を付したのももちろん船上の書き手 Eduard であると考えなければならない。

12) S. 28.

13) 上掲人文研究第64輯掲載第二章(四)(S. 135-139)を参照されたい。これらの

の Stopfkuchen による事件の「真相暴露」¹⁴⁾に至るまでは、ごくわずかな断片の域を出ない。BE における Eduard の回想という形で、S. 23では赤の砦の主、農夫 Quakatz が世間と反目し合い孤立しているらしいことが示され、S. 24では Quakatz の娘 Titchen の不良少女のような姿が示され、また S. 28では、先に見たように、Quakatz が無実らしいことが少年 Stopfkuchen の口を通して示された。しかしまだ事件のあらましすら示されてはいない。S. 32に至って初めて、赤の砦訪問の途次における BE の Eduard の感懐の一部から、Quakatz が三度裁判に掛けられて三度とも証拠不十分で有罪にならなかったことがわかるのである。だが「事件」についてのこのような極度の情報不足にもかかわらず、あるいはむしろ、情報不足であるからこそ、読者が「事件」への関心を募らせるのは、先の「暗示」と頻出する Kienbaumsmörder 等の表現とがいわば通奏低音をなして読者の「事件の真相」への関心を絶えず刺激し続けるからだ。地の文における Eduard も、談話における Stopfkuchen も Titchen も、回想に現われた世間の人間も、はては Quakatz 自身に至るまで¹⁵⁾、誰もかもが、Quakatz に下手人の烙印を押す Kienbaumsmörder 等の言葉を耳障りなほどしきりに口にするが、ところどころに〈Quakatz = 無実〉の暗示が配されている¹⁶⁾ので、例の言葉が頻繁に現

表現は、この小説中の数多の表現に見られる人を惑わせる両義的性質を最もよく示している。一方では、それらは、本章の検討によって明らかになるであろうように、読者の「殺人事件」への興味を故意に刺激する機能をもつが、他方では、この手記の「再現」という基本的技法が暴露され、従って犯罪小説風の偽装が取り除かれた後にも、第64輯で明らかにしたように、それらは今度は、巧妙にも、再現されたものとしての BE において然るべき機能を果すものとして立ち現られる仕掛けになっている（例えば、BE の Eduard の「無知」の標識として、あるいは、この無知をからかう際の Stopfkuchen の恰好の武器として）。

14) ここで言う事件の「真相暴露」とは、広義には、Stopfkuchen による真犯人の暗示 (S. 162) を含むが、基本的には、Quakatz 晩年の生活振りから語り起こされ「Störzer の白状」で結ばれる Stopfkuchen の談話 (S.168-193) を意味する。

15) S. 99. この箇所は、迂濶にも、上掲第二章 (四) の検討の際に示し忘れた。

16) S. 33, S. 58, S. 88等々に、そもそも真犯人は誰かという問、ないしは Quakatz ≡ 犯人の暗示が見出される。

われれば現われるほど、その疑わしさ、胡散臭さがますます大きくなり、「事件の真相」への興味がますます募るという按配なのである。まさに、ironische Umkehrung の実に巧妙な手口と言わなければならない。

しかしながら、読者の「事件」への誤った関心を決定的なものにするのは、「実はオレは事件の真犯人を知っているんだ」¹⁷⁾ という例の Stopfkuchen の爆弾発言に他ならない。読者は、Eduard が赤の砦に到着して以来、すでに40ページ (S. 53-93) にもわたって、彼とともに¹⁸⁾、Stopfkuchen の晦渋・不可解で他人の容喙を嫌う昔語りに付き合わされてきた。そして昼食後、彼の昔語りは、ようやく彼が赤の砦へ出入りし始めた具体的な経緯に差し掛かり、話が一転して迫真の色を帯び始めた矢先に¹⁹⁾、彼は全く出し抜けに、Eduard にも Tinchen にもそしてもちろん読者にも最大の関心事である先の爆弾発言を投げつけるのである。副題によって「犯罪事件」への誤った方向づけを与えられ、例の「暗示」と Kienbaumsmörder 等の表現とが奏でる通奏低音によって「事件の真相」への関心を募らせてきた読者は、この爆弾発言によって決定的に「犯人は誰か？」式の発想法に取り込まれることになろう。こうして、作者の仕掛けた、読者の関心をもっぱらいわゆる「事件」の方へ引き寄せるためのトリックの小道具たるミスディレクションは、所期の成果を収めるように思われる。70ページ以上後に控える事件の「真相暴露」によって、読者の「関心」に肩すかしを食らわせるための準備はほぼ整っているように見える。

だが、この小説において作者が仕組んでいる「読者騙し」のカラクリは、以上に概観してきた「事件」への誤った方向づけのみにはもちろんとどまらない。この方向づけを小説内部において引き継ぎ補完しているのは、例の「視点」の操作である。「事件」への誤った方向づけが読者に見当違いの期待を抱かせ、

17) S. 93の当該箇所的要約的引用。

18) 読者が Eduard の視点に取り込まれる過程については、本章 S. 49 の下の段落以下を参照されたい。

19) S. 83-88では、Stopfkuchen と Tinchen や Quakatz との最初の出合いが、S. 90-93では彼の二度目の赤の砦訪問の様子が、珍しく具体的で生き生きとした語り口で語られる。

「視点」の操作が、一方においてこのあらぬ期待を「真相暴露」まで巧妙に焦らしつつ引き延ばし、他方においてこうして読者の注意を「事件」の方へ逸らしつつけることによって、Stopfkuchen の言葉の真意を隠蔽する²⁰⁾。

「視点」の操作とは、概括して言えば、採用されている「再現」という手法を極力伏せて作中人物 Ich を語り手 Ich と誤認させることによって、読者の視点を Ich として登場する BE の無知な Eduard のそれに同化させることである。要するに、読者をして、Ich たる BE の Eduard を Ich-Erzähler と思い込ませるトリックである。もちろん、このトリックの根幹は、「再現」という基本的技法の隠蔽にあるが、ここでもこれを側面から補足する二、三のミスディレクションが仕掛けられている。それは、ひとつには第一章で別の角度から検討した例の SE なる擬制的な時間レベル²¹⁾であり、いまひとつには BE の地の文に散見される成功者 Eduard の、無知なるがゆえの余裕と自信に溢れた、いかにも Ich-Erzähler 然とした物言いである²²⁾。

この小説では、南アフリカへ向かう船の上で目下せさせと手記を認めている書き手の Eduard 自身が、厳密に数えると長短取り混ぜて合計18回直接手記の中に顔を出して²³⁾、この手記の目的や身の回りの様子等について述べている。

20) この隠蔽の仕組みについては、本章(二) S. 53 以下を参照されたい。

21) 第一章における検討は、「再現」という基本的技法の隠蔽を解く契機として、この時間レベルが、他の二つの時間レベルを遠近法的に統御する定点ではなく、単なる切り離された一個の現在であり、それもほとんどあらずもがなのものでしかないことを明らかにしようとした。本章では、この時間レベルが、初めて読む者に対しては、Ich-Erzähler の存在を錯覚させる一個のミスディレクションの機能を果しうることを示したい。

22) これらは、第二章(二)で詳細に検討したように、再現された時間レベル BE における無知な登場人物 Eduard のその時々感懐の表出にすぎない。しかし、「再現」という基本的技法が見抜けなかり、これを Ich-Erzähler の説明と捉えたとしても不思議はない。これらの、Ich-Erzähler のものと誤認しやすい地の文に現われた表現については、上掲人文研究64輯 S. 125-130を参照されたい。

23) 船上の場面(SE)は次の18箇所である。① S. 7-8, ② S. 10-11. ③ S. 15
④ S. 40 ⑤ S. 48-49 ⑥ S. 58-60 ⑦ S. 68 ⑧ S. 73 ⑨ S. 78

すでに「真相暴露」まで読んで一度一杯食わされて改めて小説全体をゆっくり振り返る機会を持ちえた読者ならいざ知らず、初めて読んだ読者が、この「書き手の現存」に唆かされて、手記本体における「語り手の現存」を予断してしまったとしても軽卒の謗を受けるには当らず、むしろそれは小説の通念に従った正常な判断だろう²⁴⁾。そして、手記中でいかに Ich-Erzähler 然として余裕たっぷりに解説を加えているかに見える人物(地の文に現われた Eduard)に接するに及んで、「語り手の現存」を信じてかかる読者の予断が確信にまで高まるのは見易い道理といってもよいだろう。こうして読者は二重のミスディレクションの罠に掛かって、第二章で詳細に検討したようにそれが単に登場人物にすぎないにもかかわらず、BE の Eduard を Ich-Erzähler と誤認しその視点に同化するに至る。しかもその際留意すべきは、この Eduard が、「事件の真相」を何も知らず、その無知に付け込んだ友人の Stopfkuchen によってさんざん焦らされ翻弄された挙句の果てに、事件の意外な真相のみならず自らの人生の浅薄さをも思い知らされるに至る人物である、という点である。つまり、Eduard の無知は「真相暴露」²⁵⁾まで読者に伏せられたままなのである。従って、BE の Eduard を Ich-Erzähler と誤認しその視点に同化した読者は、当然ながら、同時にそれと知らずに彼の「無知」をも共有することになる。

こうして読者は、一方では副題を中心とする「事件」への誤った方向づけに唆されて犯罪へのあらぬ通俗的な興味を抱きつつ、他方では、さしあたり「再現」というこの手記の基本的技法が見抜けないので、「書き手の現存」と「Ich-

(単なる一連の Gedankenstrich にすぎないが、おそらく船上の Eduard の感慨を示していよう。) ⑩ S. 81 ⑪ S. 93 ⑫ S. 101 ⑬ S. 118-119 ⑭ S. 145-146 ⑮ S. 162 ⑯ S. 180 ⑰ S. 195 ⑱ S. 206-207.
⑲ S. 180 ⑳ S. 195 ㉑ S. 206-207.

24) 小説技法の歴史において、19世紀は、18世紀の「公然たる語り手」に代って、一人称や三人称の視点人物を設定する、いわゆる「視点的方法」が台頭、定着した時代であった。

25) Eduard の無知は、S. 162 における Stopfkuchen による真犯人の暗示によって一応終止符が打たれる。

Erzähler 然とした作中人物 Eduard の姿」とに誘動されて BE の Eduard を Ich-Erzähler と誤認することによって、彼の無知な視点にその無知も知らずに同化しつつ、作品の中へ^{まろ}転び入ることになる。以上が、この小説に仕組まれた読者を誤読へ^{そび}誘き入れるトリックの基本的なメカニズムであり、またこのトリックの手に落ちた読者が強いられる誤読の基本的なありようである。

こうして BE の Eduard の無知な視点に同化した読者は、彼同様に Stopfkuchen の話術によってさんざん弄ばれることになるが、しかし両者の置かれた位相にはかなりの隔りがあることに十分留意しておく必要がある。この事情を端的に説明すれば、BE の Eduard は単に Stopfkuchen の話術によって翻弄されるだけだが、読者はこの翻弄される Eduard のありようを含めた作品全体によって翻弄されるのだ。SE の書き手 Eduard が一番胡散臭く信用の置けない存在であるらしいことは、例えば彼が付したほとんどペテンに近い副題を見ただけでも明らかだろう。つまり、作者によって割り当てられた彼の役回りは、読者をあざむこうとする作者の意を体して、すでに一度 Stopfkuchen にやっつけられた自らの現在の「全知」をひた隠しにしつつ、更に念の入ったことには、「殺人事件」へのあらぬ期待を吹き込んだその上で、読者を BE における自らの著しく不利な立場へと誘動することにあるのだ。しかし、SE の Eduard ばかりではなく BE の Eduard も、よく注意して観察すると、ずいぶん油断のならない存在だ。Stopfkuchen によって一方的に手玉に取られて一見するといかにも気の毒な彼のありようも、Stopfkuchen の言動の晦渋・不可解さを強めついにはそれを謎に仕立て上げるためにこそ考案されたものであるらしい節がある。つまり、Stopfkuchen の言動に対する彼の的外れの反応は、それに読者が同調する時、その言動の真意を一旦隠蔽する機能を果すからだ。この時読者は、当初の期待が一向に満たされぬまま、まるで迷路に迷い込んでしまったような思いに苦しめられることになる。我々は次に、迷路行にも似た誤読の具体的な展開過程を辿ってみよう。それは同時に、この小説に仕組まれた Retardation の手管の一解明ともなろう。

(二) 誤読のプロセス

この小説において読者が辿らざるをえない誤読の展開過程は、その性質に応じて五つの部分に分けることができる。ただし、ここで検討の対象として取り上げるのは、BE の Eduard が Stopfkuchen と再会して本格的に対話が始まる S. 62から、Stopfkuchen による事件の「真相暴露」が終る S. 193までとする。「事件」への誤った関心と BE の無知な Eduard の視点への同化とを基本的な制約条件とする誤読が実質的に展開されるのはこの部分においてだからである。またここでの検討に際しては、何よりも、読者の関心を誘動することによって本来意味あるもの（これは主として赤の砦上での Stopfkuchen の談話の中に含まれている）が一旦隠蔽される現象に常に留意する必要がある。というのは、この小説は、読者がそこに本来ないものを捜し求めそこに実はあるものを見逃して、結局捜していたものがないことに気がついて初めて、あったものに、隠されていた意味に思い至る、という読みを強いるように作られているが、ひとたびの必然的な読み違いの際に見逃がされる意味あるものの中にこそ作者の真意が封印されており、またこの小説における作者の読者に対する執拗な挑発の究極的な意図も、読者が幾重にも張り回された韜晦の仕組みを見抜いてこの真意の開示に到達しうるか否かを試す点にこそあると考えられるからである。作者は Stopfkuchen の晦渋な表現の背後に身を潜めており、それ以外のこの小説の全構成要素はこうした表現を幾重にも蔽い隠す韜晦のべールに等しい。(だが、本章では意味あるものの隠蔽のされ方のみを検討し、意味の開示は次章に譲る。)

(1) 第一段階 (S. 62-83)

この部分では、主に Stopfkuchen が、実際に赤の砦に出入りし始める以前における自分と砦との宿命的な因縁について語っている。語られた内容としては、第一に奇妙きてれつな Friedrich 大王礼賛²⁶⁾、第二に Stopfkuchen

26) S. 64.

の少年時代にまつわる Eduard を含む友人達への恨み言めいた話²⁷⁾（だが実は Eduard へのからかい）、第三に七年戦争当時赤の岩から発射され、彼の生家の壁に突き差さったままになっていた砲弾²⁸⁾、第四に少年時代彼の家にあった郷土史の通俗本²⁹⁾、第五にアマチュアの郷土史研究家 Schwartner との七年戦争と赤の岩との関係の調査研究³⁰⁾、等々が挙げられる。また、彼がさらに昼食に先立って話した、玄関の上に掲げられた「ここに神ノアに語りて言給はく、汝方舟を出ずべし」なるいとも珍妙な銘³¹⁾、彼の趣味である古生物学上の化石のコレクション³²⁾等の話題も、話の内容や意味の隠蔽のされ方がきわめて類似しているので、ここで一括して検討しておいてよいだろう。

これらの話題は、よく詮索してみると、彼の人生観や世界観にかかわるものばかりである。だが、彼の晦渋至極で冗談めかした語り口と、これにあきれ返ったり³³⁾ 退窟に苦しんだりする³⁴⁾ばかりの不明な Eduard の反応とが相呼応して、これらの話の意味を一旦隠蔽するはずだ。例えば、一見すると奇妙きてれつとしか思われぬが実は彼の人生観を隠しているらしい Friedrich 大王の礼賛は、それに続く地の文で Eduard が「こんなに山ほどもの支離滅裂な御託をいっしょくたにして並べる」³⁵⁾ Stopfkuchen に、「はてさてこいつはたまげた、この分じゃこの先どういうことになるものやら」³⁶⁾ という反応しか示さないで、この反応を Ich-Erzähler のものと信じる読者によってその意味が見逃されたとしても不思議はない。全く同様に、Stopfkuchen の談話に含まれる時間の観念³⁷⁾、自足性³⁸⁾、外部世界とのかかわり方³⁹⁾等々が、彼

27) S. 65-67.

28) S. 68.

29) S. 69.

30) S. 70-72.

31) S. 75.

32) S. 76-77.

33) 例えば、S. 72, S. 73, S. 75 他多数。

34) 例えば、S. 73 等。

35) S. 64.

36) S. 65.

37) 38) 39) S. 64 から S. 86 にかけての、晦渋・不可解で奇妙きてれつな Stopf-

の晦渋な表現の中に埋もれたまま見過ごされることになるはずだ。

これらの Stopfkuchen による因縁話に耳を傾ける Eduard の態度や反応の仕方は、友人によってかなり翻弄されてはいるものの、おおむね落ち着いたもので、海外での成功者としての(不明な)自信と優越感がそこそこに滲み出ているように見受けられる。彼によって誤り導かれる読者の方も、これに応じて、「事件」への関心が一向に満たされぬことにもさほど苦しむことなく、おおむね Stopfkuchen の取り止めのない奇解な言動に驚きあきれていることだろう。

(2) 第二段階 (S. 83-96)

この部分では事態が大きく変化する。すなわち、Stopfkuchen がこの変に気を持たせる因縁話に続いて、Eduard と Tinchen (Stopfkuchen の妻) の二人を聞き手にして、赤の砦へ出入りし始めた顛末と殺人容疑者 Quakatz との出会いについて、直接引用を多用する実に具体的で生き生きとした語り口で物語ってゆき⁴⁰⁾、やがて出しぬけに「実は真犯人を知っているんだ」⁴¹⁾ という例の爆弾発言を口にするに及んで、小説の中の Handlung そのものの性質も、これに組み入れられている読者の関心の性質も一変するのである。この意表を衝く発言を聞いて、Tinchen は自分と容疑に苦しみ抜いて死んでいった父 Quakatz とに惨酷な人生を負わせた張本人の名を今すぐ教えるよう夫に迫り⁴²⁾、友人の意外な発言によって犯人についての自らの予断を打ち砕かれて驚到している Eduard も、Tinchen に加勢して詰め寄るが、⁴³⁾ Stopfkuchen は浮き足立つ二人を全く黙殺し自分の決めたこれまでどうりのタイム・テーブルに従って、再び Quakatz とのその後の交わりの進展について語り継いで

kuchen 言動のそこそこに、いわば象徴や観念の隠し絵の観を呈して、《意味あるもの》が鑿められている。だがその検討は次章に譲る。

40) S. 83-93.

41) S. 93の当該箇所を要約的引用。

42) S. 95.

43) S. 94.

ゆくのである⁴⁴⁾。ここにおいて何よりも注目すべきは、小説中の Handlung のレベルにおいても、また読者の関心のレベルにおいても、生き生きと語られた赤の砦の悲惨な歴史の「重さ」と事件の真相への「関心」とがここで激しく衝突していることである。そして Handlung のレベルで言えば、この後延々 S. 149まで、Stopfkuchen が家政を立て直すに至るまでの赤の砦の歴史が、Stopfkuchen 自身と Tinchen の口を通して語られてゆくが、そこには常に「真犯人は誰か？」という最大の関心事が棚上げされた Tinchen と Eduard の強い苛立ちが付き纏う⁴⁵⁾ので、歴史の「重さ」と事件の真相への「関心」との鋭い緊張関係が一貫した底流をなすことになる。

読者も、同様に歴史の「重さ」と事件の真相への「関心」との間を揺れ動き続ける。しかし、ここにおける読者の位相は Eduard や Tinchen のそれとはかなり異なる。それは、先に見た関心の誤った方向づけと視点の操作による。読者の「関心」について言えば、すでに「基本的メカニズム」の項で述べたように、副題以下の意地悪な方向指示標識の誘動によって読者の中で燻り続けてきたいわゆる「事件」への関心は、先の「爆弾発言」によって一挙にその通俗性⁴⁶⁾の度合を強めて「犯人は誰か？」式の発相法の圏内に取り込まれているはずであり、またそれはさらに、「爆弾発言」に続く「真相の棚上げ」のもたらす「焦らし」の効果によって、一層抜き難いものになっているはずである。また読者の視点は、無知な Eduard を Ich-Erzähler と思い定めているかぎり、もちろんこの場面でも驚倒している Eduard の側に据えられているだろ

44) S. 97以下。

45) Tinchen の苛立ちは、S. 102, S. 118, S. 147等に見られる。そして Eduard は、このような彼女に終始同情的であるように見受けられる。

46) Raabe は、この小説で見るかぎり、「犯人は誰か？」という類の発想法や、その種の興味に訴える「犯罪小説」や「推理小説」を通俗的なものとして軽蔑していた節がある。ところで、この時期(19世紀末)に英米では、コナン・ドイルをはじめとする推理小説家に人気が集まりこの種のジャンルの隆盛期を迎えていたことを思えば、こうした Raabe の物の見方は、ドイツの思惟(社会的背景を踏えた意味での)の特性を考察する際の一助となりうるかもしれない。Raabe のこの小説を、推理小説のパロディーとして把えることは十分可能であろうが、その際最も問われるべきは、パロディーを構想せざるをえなかった思惟の特質であろう。

う。しかも、読者が増幅された「事件」への（通俗的）関心にわざわざされて、「真相」を棚上げにする Stopfkuchen の意地悪に反発を感じれば感じるほど、また彼の晦渋・不可解な言動に不快感を覚えれば覚えるほど、その分だけ同様に彼によって焦らされている Titchen や Eduard の「苛立ち」への思い入れの度合が強まるであろう。このように「事件の真相」への過剰な関心に囚われ、その上 Titchen や Eduard の無知な⁴⁷⁾「苛立ち」に同調してしまった読者が、今そこで語られている Stopfkuchen の人生をも含めた赤の砦の歴史の「重さ」の孕む意味の大部分を見逃したとしても不思議はない。読者には、時に確かに胸を打つ歴史の「重さ」も、さしあたっては、むしろ「関心」充足への妨げとしか思えないであろうから。こうして、「歴史」の宿す究極的な意味は、それが読者によって「関心」への焦らしと誤認されるかぎりにおいて、一旦相対的に隠蔽される。

実はこの時点ですでに、読者は、「爆弾発言」から事件の「真相暴露」にかけて敷かれた誤読の軌道の上を走り始めている。この軌道は端的に《Retardieren → Desillusionieren》⁴⁸⁾と定式化することができよう。ここでは、読者の「事件の真相」への作られた関心は、本来意味あるものを自らの障害物、つまり「焦らし」として排除するように誘動され、最後にそれは耐えがたいほど増幅された上で、期待された対象とは似ても似つかぬ、見るも哀れでつまらない代物を差し出されるに至って初めて、作者によってまんまと計られたことを知る、という経過を辿る。しかし「幻滅」するまでにはまだだいぶ間がある。今しばらく「関心」の走行状態を点検してゆかなければならない。

47) Titchen も Eduard も、Stopfkuchen に切札（真犯人の正体）を握られており、また「犯人」のみを問題する発想の底の浅さ（これが、作家および Stopfkuchen の考え方だ）をも知らないという二重の意味で「無知」ということになる。

48) retardierendes Moment（遅延、引き延ばしの要素）は、通常は、演劇の第四幕（終幕に先立つ）において、必然的結末とは異なる葛藤の解決可能性を示すことによって、終幕への緊張を高める機能を果たすが、本稿ではこれを広義に解釈して、「最大の関心事の引き延ばしとそれによる焦しの効果」について用いる。retardierendes Moment については、Gero von Wilpert: Sachwörterbuch der Literatur (Alfred Kröner Verlag Stuttgart 1979) S. 676 を参照されたい。

(3) 第三段階 (S. 97-152)

この部分では、小説中で最も内容豊かな談話が交される。Tinchen と Stopfkuchen の口を通して、まず、世間から孤立して悲惨のどん底にあった往時の赤の砦の有様が⁴⁹⁾、次いで Stopfkuchen が大学を中退した後赤の砦に居着くきっかけとなった冬の夜の出来事が⁵⁰⁾、さらにはその後 Stopfkuchen が農夫頭として赤の砦を取り仕切り始めた様子⁵¹⁾や彼と Tinchen との結婚式の経緯が⁵³⁾、また最後に彼による赤の砦の経済状態の改善⁵²⁾等が語られてゆく。しかしこれはあくまでも後からする語られた内容の要約であって、Erzählung そのものが Handlung をなす各場面を理解することはそれほど容易ではない。Tinchen が語っている場合では、Stopfkuchen が実にしつこく厭味な半畳を入れる。これに対して Eduard は、いつも彼女への同情を示し彼女に語り続けるよう励ます。また Stopfkuchen の語り口は相変らず晦澁を極め、直ちにその意のあるところを理解することはほぼ不可能といってよいだろう。そのような彼の話し振りに Tinchen は絶えず苛立ちの様子を見せる。また Eduard は、友人の話にじっと聞き入っているものか、それともそれを理解できずに困惑しているものか、ともかく小説中に全然顔を出さないことが多い。

こうした中で読者の誤読はどのように進行してゆくのか。基本的には相変らず第二段階で敷かれた《Retardieren→Desillusionieren》の誤読の軌道上をひた走っているはずで、その把握はそれほど困難ではないだろう。要は、一方で今語られている赤の砦の歴史の「重さ」を痛感していながら、他方では「事件の真相」への増幅された「関心」のせいで、さしあたりは「重み」が「関心」への妨げ、焦らしと感じられる、という読みの流れが把握されればよい。この流れを裏付ける二、三の例を挙げてみよう。S. 102には、Stopfkuchen の言葉と Eduard による地の文とが相呼応して、歴史の「重さ」を鞘晦しかつ事件

49) S. 98-122.

50) S. 125-139.

51) S. 139-141.

52) S. 142-145.

53) S. 146-148.

への「関心」を刺激している例が見える。ここで Stopfkuchen は Tinchen に、「事件の真相」は後回しにして彼ら二人の「愛の物語」を話すように促し、しばらくはこれまでどおり「おれたちの牧歌」(傍点筆者。以下同じ。)に留まろう、と言っている。そしてこれに続く地の文は、夫人 (Tinchen) はそこで不承不承この促しに応じてしばらくは「彼女と彼の人生の牧歌」に留まり、「Stopfkuchen が赤の砦の秘密を暴くに先立って」次のように語った、となっている。この地の文は、Stopfkuchen の言葉に乗せられた BE の無知な Eduard の視点を反映しているとも言えるし、また書き手を操る作者が読者を故意に陥れようとしたものとも言えようが、いずれにしろこの小説中の多くの表現同様に両義的でどちらの意味にも取れるように出来ている。これを初めて読む読者は、Stopfkuchen の表現とこれに全く呼応する地の文のそれとに誘動されて、本当は本質的な意味が付与されている「歴史」(ここでは Stopfkuchen と Tinchen の出会いとその当時の悲惨な砦の有様)を本題に先立つ呑気な「牧歌」と見なし、また結局は読者を陥れるための単なる偽装にすぎない「事件の真相」を重大な意味をもつ「赤の砦の秘密」と見なしてしまうにちがいない。これに続いて、Tinchen が悲惨のどん底にあった往時の赤の砦の有様について物語る (S. 104-114) が、上で見たように、あらかじめその意味にベールが掛けられ、また最大の関心事である「事件の真相」が「秘密」と銘打たれた上で先に持ち越されるので、読者が彼女の痛ましい話に引き入れられつつ同時に今ひとつ没入しきれない居住いの悪さを覚え続けたとしても無理はない。後に彼女が、Stopfkuchen が大学を中退して赤の砦にやってきた冬の夜の出来事を物語る際 (S. 125-130) にも、読者はほぼこれと同じ読み方をするだろう。

一方、Stopfkuchen が語る際には読者はどのような状態に置かれるだろうか。往時の赤の砦の悲惨さについての彼の文字通り判じ物めいた話し振り⁵⁴⁾、醜怪な Quakatz の人物像の描写⁵⁵⁾、大学を中退しその後赤の砦を訪れるまでの顛

54) S. 115-118.

55) S. 119-122.

末を語る際の、大学批判や俗物批判をふんだんに折り混ぜた、ほとんどすべて Ironie 仕立てと言ってよい語り口⁵⁶⁾、農夫頭としての彼の活躍振り、Tinchen との結婚式の様子、赤の岩の経営改善への彼の努力等々の語り口に見られる謎と Ironie とおふざけのごった煮とも言うべき数々の表現。読者は、このあたりでは Eduard が全く表面に現われないので、これらの晦渋・不可解で奇妙きつな表現に直接晒されるか、さもなければせいぜい、夫のこうしたひどい話し振りに「そんな話もう聞くに耐えないわ!」⁵⁷⁾とか「もう口なんかきくものですか!」⁵⁸⁾などと言ってひどく苛立つ Tinchen の反応が添えられているのを見出すにすぎない。だがこの Tinchen の反応が読者に対してミステイクションの役割を果す可能性はきわめて大きいだろう。というのは、Stopfkuchen の表現の不可解さに苦しむ読者が、この Tinchen のきわめて常識的で正当に見える反応に同調することは大いにありうるが、しかしながら、そのことによって Stopfkuchen の数々の不可解な表現はますますその不可解さの度を加え、謎として放置されるだろうからである。この作品における作者の読者に対する基本的姿勢を考えれば、Stopfkuchen の表現と Tinchen の反応との間にこのような隠蔽への作為を読み取ることはさして不自然ではなからう。

やがて Stopfkuchen は「事件の真相」を棚上げにしたまま、Eduard を送って町まで出掛けてくると言い出す⁵⁹⁾。「苛立ち」の頂点に達する Tinchen⁶⁰⁾。さんざん焦らされてきた Eduard も、Tinchen に加勢して Stopfkuchen を「人でなし」⁶¹⁾と罵り、「事件の真相」を今この場で話してしまうように迫る⁶²⁾。間違いなく読者も、Stopfkuchen の Tinchen へのこの仕打ちに対して Eduard と同じ反応を示すにちがいない。この仕打ちを、夫の妻に対する

56) S. 130-137.

57) S. 143.

58) S. 145.

59) S. 149.

60) S. 149-150.

61) S. 150.

62) Ebenda

Lehre (訓戒) だなどと呑気な意味付けができるのは、ひとりこの作品を徹底的に詮索した研究者のみであって⁶³⁾、これを初めて読んだ読者が、これまで Eduard や Tinchen に同調させられてきたことも手助って、ここで Eduard とともに、「苛立ち」を通り越して「怒り」を覚えるのは止むを得ないところと言える。そしてこのように Stopfkuchen への不快の念が昂ずるにつれて、彼の表現に胚胎する意味はほぼ完全に隠蔽されることになろうが、赤の岩の歴史の「重さ」の余韻のようなものは読者の心に残るかもしれない。

(4) 第四段階 (S. 152-165)

この部分における Handlung の流れは次のようである。あくまでも自分の思惑どおりに事を運ぼうとする Stopfkuchen は、連れて行くようにせがむ Tinchen を説き伏せて、結局 Eduard と二人だけで町へ出掛ける⁶⁴⁾。途中二人は、Eduard の人生に大きな影響を与えた恩人で昨日亡くなった Störzer の家に立ち奇ることになる。その道すがら、久方振りに旧知の町のたたずまいに接した Eduard は、万感交^{こもこも}に到ってしばらくはただひたすら込み上げる懐旧の思いに浸っている風情⁶⁵⁾。やがて Störzer の棺の前に立った彼は、感傷的な気分を満たされながら亡き恩人への哀悼の祈りを捧げる⁶⁶⁾。この機を見逃さず傍らの Stopfkuchen が、この Störzerこそ真犯人であることを仄かす⁶⁷⁾。丁度この時船長がやってきて船上の我に帰る書き手 Eduard。しばしの中断の後再び BE の場面。人生の根底喪失の思いに呆然としつつ、Stopfkuchen に導かれて客のいない酒場「金腕亭」に入ってゆく Eduard⁶⁸⁾。……

ここでは、Eduard の無知と Stopfkuchen の全知が音を立てて衝突している。Eduard が、その感化の下に成功者としての人生を築き上げてきた当の恩

63) Herman Meyer, a.a.O. S. 121-122.

64) S. 155

65) S. 159-160.

66) S.162.

67) Ebenda

68) S. 163-165.

人が殺人者だったとは。彼は Stopfkuchen によってさんざん焦らされた挙句に、自らの人生の根底を揺がす痛撃を食らっている。このようにして Stopfkuchen は、Eduard の成功者としての優越感の鼻っ柱をへし折ったのだ。

読者も、この Stopfkuchen の仄かしには大いに意表を衝かれ一驚を喫することだろう。しかしこの読者の意外の念は、Eduard のものとはかなり性質を異にすることに注意しておく必要がある。この読者の思いは、Stopfkuchen に対してと同様に、あるいはもっとそれ以上に、Eduard その人に向けられているであろうから。すなわち、読者は Eduard とともに Stopfkuchen によって不意を衝かれると同時に、Eduard によっても不意を衝かれるのだ。彼の「無知」を初めて知るからである。要するに、彼の「無知」が隠蔽されていたからこそ、彼とともにここで Stopfkuchen によって意表を衝かれる羽目に陥ったのだ。そしてそれが隠蔽されえたのは、彼が終始 BE における作中人物にすぎなかったからだ。従って地の文に現われた Eduard の説明も、ここまで「無知」が隠蔽されてきた以上、船上の書き手 Eduard の全知の視点を全く含んでおらず、つまり Ich-Erzähler の手になるものではなく、単に登場人物としての Eduard のその時々之感懐の表出にすぎなかったのだ。

こうして読者は、Eduard のありようを含めた作品全体の仕組みに不信の目を向け始めることになる。そこまでゆけば、ここでの Stopfkuchen による真犯人の暗示に続く書き手 Eduard の顔の出し方も、読者には、Zeitvermischung（時間レベルの混合）を弄ぶことによって故意に作品への没入を妨げ視点を攪乱しようとするはなはだ胡散臭いものに見え始めているにちがいない⁶⁹⁾。また読者は、BE の Eduard の人生の根底喪失の思いとやらをあまりよく理解で

69) P. ラボックは、作品中のある人生に深く入り込んでいる最中に、突然そこから「引きずり出されて遠方に置かれることは、読者にとってひどい衝激であり云々」(P. ラボック『小説の技術』(佐伯彰一訳、ダビッド社、昭和32年初版)。原著名は The Craft of Fiktion で1921年刊)と言っているが、まさにこの衝激を、SE というあらずもがなの時間レベルは狙っている節がある。読者をからかおうとする作者の意図が露呈した趣きで、ここで作者は、「本当らしさ」という作品本来の効果を犠牲にして読者への挑発を行なっているように思われる。

きないはずだ。Eduard の方は、この後ずっと暗澹たる気持ちで時を過すことになるが、Störzer との交際を含めて彼自身の人生全体が一度として内実を伴って提示されることがなかった⁷⁰⁾ので、読者はこの時の彼の内心にほとんど感情移入することができないからである。

このように読者は、BE の Eduard のみならず作品全体に対してもやや距離を置き始めてはいるが、「事件の真相」への関心それ自体は一向に衰えを見せてはいないだろう。それどころか、読者の「関心」は、これまでさんざん焦らされてきただけに、ここで意外な真犯人を示されたことによって、むしろ一挙に膨れ上がることだろう。読者は、いよいよ《Retardieren→Desillusionieren》なる誤読の軌道の最終段階に達しようとしている。Desillusionieren を狙う作者の機はようやく熟しつつある。

(5) 第五段階 (S. 165-193)

この部分では、Stopfkuchen によっていよいよ「事件の真相」が暴露されることになるが、全体がいわば幾重もの retardierendes Moment の入籠の観を呈して、徐々に高められた緊張が極点に達したところで期待されたものとは似ても似つかぬつまらぬ対象が現われ出る仕組みになっている。S. 166 から S. 185 Z. 7 までの部分は、「事件の真相」そのものへの一種の導入部を

70) Eduard の人生がほとんど提示されていないことはすでに第三章(二)「背景の欠落」で検討した(上掲人文研究第66輯 S. 59-62)。少年時代の Eduard と Störzer の付き合いについては、確かに S. 15-24にかけて書かれてはいるが、しかしそこでは実は Handlung の上での予示が大部分を占め、Eduard が Störzer から受けた影響としては、地理への関心が挙げられているにすぎない。だが二人の交際の結び目をなすこの地理的関心は、二人の精神的な結びつきの深さを具体的に示しているというよりは、むしろ作者の時代批評の図式の直接的投映という色合いが濃い。なぜなら、この地理的関心は、第一に犯罪者 Störzer にとって気散じの対象となり、第二に海外での成功者 Eduard の人生のバックボーンとなり、またおそらく第三に犯罪への通俗的興味と軌を一にするもので、このような意味において総じて時代精神の一類型として扱われているからであるが、このことは、主人公 Stopfkuchen の思惟の基盤が「時間的求心性」に据えられていることを考えれば一層明瞭になるだろう。だがこの地理的関心の問題は、すでに次章で論じられる「謎解き」の領域に属している。

なしており、「真相」への興味を再三にわたってしかも効果的に焦らすことによって、緊張の糸を十二分に引き絞る役割を果たしている。またそれに続く「真相暴露」それ自体（犯人 Störzer の白状, S. 185. Z. 8. — S. 193）も、Störzer によるいかにも冗長な背景の説明が、最後の retardierendes Moment として「焦らし」の効果を極点まで高めた後に実につまらぬ事件の事実関係が現われる、という構成になっている。

まず、導入部をなす部分を見てみると、Stopfkuchen が酒場の女給 Meta と Eduard を思いのままに手玉に取りながら、徐々に話の中に引き入れ呪縛してゆく様が見られる。Eduard が、友人の語る恩人の犯罪の顛末に固唾を飲んで耳を傾けているのは言うまでもない。Stopfkuchen は、Tinchen と力を合わせて Quakatz の晩年を幸福なものにした次第から話し始めるが⁷¹⁾、巧みな話術によって間もなく Meta をも自分の話の中に引き入れてしまう。彼が Quakatz の葬儀で話された牧師の説教を手取るように再現してみせる⁷²⁾頃には、彼女はすでに彼の話術にすっかり呪縛され尽している。これを見抜いている彼は、酒場の外を通りかかった人に突然「ミューラーさん！」⁷³⁾と呼び掛けて、話に没入していた Meta の気を殺ぐことで焦らすのだが、こう焦らしておいてまた一層強烈に興味を刺激することを忘れない。葬儀の際挙動不審の男が一人いたが、それに気付いたのは彼だけだった⁷⁴⁾。これを聞いて、Meta と Eduard は一気に「事件の真相」の問題圏内に引き入れられるが、ここで Stopfkuchen は急に話のテンポを緩める。超スローテンポで、葬儀の後 Tinchen に付き添って帰宅した様子を事細かに話す⁷⁵⁾。やがて、その不審な人物の名を伏せながらおもむろに「事件」の話へと移行してゆき⁷⁶⁾、たっぷりと二人を焦らしてからまた急にテンポを速めて、「なあ Störzer……」と実

71) S. 168.

72) S. 172-173.

73) S. 174

74) Ebenda

75) S. 175-176.

76) S. 177.

名入りでしかも直接引用を多用する語り口で, Störzer に対する第一回目の個人的尋問の場面を再現してみせる⁷⁷⁾。Störzer は, Stopfkuchen の巧みな誘導尋問の前に, たまらず尻尾は出してしまうが白状するまでにはいたらない。聞き手はもうすっかり動願している。Eduard は, ついにそこに信じたくなかった恩人の名前を耳にしてしまった。Meta は, 世間同様に Quakatz を真犯人と固く信じてきた予断を打ち砕かれた。ここでまた Stopfkuchen はテンポを変えて, Meta にビールの注ぎ方が悪いと文句を言ったり⁷⁸⁾, また二回目の尋問までの経過を実にのろのろ細々と話してゆく⁷⁹⁾。そして, 聞き手の事件の「事実関係」への興味が耐えがたいほど高まったのを見計らった上で, 再び急に生き生きとした再現法に戻って, Störzer の白状の場面へと移ってゆくのである⁸⁰⁾。

この間, 読者はどのような立場に置かれているのか。S. 162における真犯人の暗示によって, 読者が, これまで自分の視点を操ってきたらしい船上の書き手 Eduard のありようを含めた作品全体に対して不信の念を覚え始めはしたが, 他方意外な犯人の名前を耳にして, 「事件の真相」への関心を一段と強めているはずであることはすでに見た。従って, 酒場の場面を読む読者は, すでに犯人の名前を知っており, また Erzähler の問題を中心とする作品の仕組みに注意を向け始めているので, 今や登場人物であることが判明した失意に沈む Eduard や Stopfkuchen の意のままに操られてやがて世間への吹聴役を演じることになる無知な Meta⁸¹⁾ に対して, 一定の距離を保ちえているだろう。しかし読者の「事件の真相」への増幅された関心は, 「真相」の方へ導いて止まない Stopfkuchen の緩急に自在を得た絶妙な話術の前にはあまりにも無力であって, 徐々に翻弄される Eduard や Meta の反応の側に(彼ら

77) S. 177-180.

78) S. 182.

79) S. 182-183.

80) S. 183 ff.

81) この Meta なる女は, S. 168, S. 182, S. 194に見られる関連する叙述からすると, Philistertum (俗物性) の守護の女神 Fama (風評の女神。また「うわさ」の意味もある。)の待女の役回りをあてがわれているようだ。

に対する若干の距離感は失わないものの) 組み入れられて行くものと考えられる。すなわち、読者はここで、これまで見られたように、Stopfkuchen の話に耳を傾ける小説中の聞き手の反応に同調するように誘動されるのではなく、その「関心」に巧みに働きかける Stopfkuchen の雄弁そのものによって直接的に誘動されているはずだ。そして、今や読者の事件の「事実経過」そのものに対する興味も、Eduard や Meta のそれに劣らず、最終的な満足を求めて十二分に高まっていることだろう。読者に Desillusion を舐めさせるための作家の準備は完了している。

Stopfkuchen が物語る「Störzer の白状」の部分 (S. 185. Z. 8.—S. 193) は、彼が Eduard に一言注意を促しているただ一箇所を除いて、延々 9 ページにわたって、彼と Störzer との間で交わされた会話全体の文字通りの直接引用から成っており、また特に後半の 5 ページ (S. 189-193) は全て Störzer の独白で占められていて、そこでは今度は Störzer 自身が Ich-Erzähler となって、直接引用を多用する語り口で物語ってゆく。まさに「白状」全体が直接引用の入籠の観を呈している。Stopfkuchen と Störzer との会話全体が一個の現在として切り取られ、さらにまたそのうちの Störzer が物語る事件そのものの事実経過の部分が一個の現在として切り取られているのである。話を独占する Stopfkuchen の、ことさらに韜晦を好む表現が行く手を阻むことの多いこの作品の中で、この「白状」の部分が一際鮮明に臨場感を伴って浮かび上がることは、上の語り口の特徴を見ただけでも明らかだろう。

このように、この「白状」の部分は、この小説全体の Handlung (もちろん Erzählung としての) の頂点をなすに適応しい場面の高揚を見せているが、問題は話された内容である。先に触れたように、S. 185. Z. 8—S. 190. Z. 20 の部分では、Störzer による冗長な「事件」の背景説明が最後の retardierendes Moment として焦らすことで緊張を極度に高めている。では、この背景説明の何が焦らすのか。その冗長さはもちろんだが、その非論理的な話の中味も実に苛立しい。すっかり観念した Störzer は必死の自己弁明を試みる。その要点は、第一に事が全く偶発的に起ったこと、第二に被害者の

Kienbaum が昔から Störzer をいじめ続けてきた根っからの悪党と言ってもよい人物であって、その死はいわば天罰のようなものであること、第三に容疑者とされた Quakatz は元来裕福な農夫で、嫌疑を受けても経済的打撃を被らなかつたこと、である。長い年月を、彼は良心の苛責をこのように自己正当化しながら、自首を一日延ばしに引き延ばして時効の成立する日を待ち続けてきた、と言う。「この苦しみから誰もワシを助けちゃくれなんだ、ちょうどワシがワシのせいで苦しんでいる赤の岩の Andres (Quakatz の名前一筆者) を助けてやることができなんだと同様にな！」⁸²⁾ という Störzer の言葉が示すように、彼自身のせいで身に覚えのない嫌疑を受けた Quakatz の苦しみと彼自身の苦しみを同列に置く彼の哀れな認識は、もっぱら自分を偶発的に事件に巻き込まれたいわば被害者としてのみ捉え、自らの行為の結果による Quakatz 一家の長い年月にわたる不幸の一端をすら正確には理解していない⁸³⁾。気の弱い律義者、これが犯人 Störzer の人間像だ。彼による背景説明は、その不透明な自己正当化において、彼の平凡な愚かさを余すところなく露呈し、そのかぎりですら人間臭さが滲み出ているとも言えようが、いずれにしろ、彼ほどいわゆる犯人らしくない犯人も珍しい。この、彼の犯人らしくなさにも、読者は焦らしを感じるかもしれないが、むしろそれ以上に、すでに期待とは裏腹な結末を予感し始めているかもしれない。焦らしも昂じるが幻滅の予感も始まっている。

長々と繰り返言っていた自己弁明を重ねた後に、ようやく Störzer は事件の「事実関係」について口を割る。事の起った夕方、郵便配達夫である Störzer が、林の中の道端で一日中走り回って疲れ果てた体を休めていると、家畜の売買で損をしてひどく機嫌の悪いばくろうの Kienbaum が通りかかり、いつも

82) S. 185.

83) S. 187の Störzer の言葉：「そしたら Schaumann さん、あんたの頭じゃあ義理のおとつぁんのことしかねえんだろうが、あんたのせにやらんこと、あんたの正しいと思いなさることをなんなりとしなさるがええ。」は、容疑のために苦しんだのは当事者の Quakatz だけである、という彼の浅はかな了見を裏書きしているように思われる。

いじめ慣れている Störzer に、おあつらえ向きの憂さ晴らしとばかりに、馬車の上から鞭で打ちかかる。いつもは弱虫の Störzer も、その日は極度の疲労のために普段の自制を失って、ふと手にした石を盲滅法に投げつけると Kienbaum に命中してしまう。すると意外にも、Kienbaum は、暗がりの中をだらりとした姿勢のまま馬車に揺られて去ってゆく。彼は、自宅に帰り着いた馬車の中で遺体で発見された⁸⁴⁾……これだけのことだ。このどこにいわゆる「殺人事件」らしさがあるだろう。文字通りのつまらぬ偶発事。興味をそそる殺し方も殺され方もここにはない。しかも犯人が気の弱い律義者で被害者が悪党。

いわゆる面白い「殺人事件」では、「殺害者が悪党であってはならない」⁸⁵⁾し、また殺人の実行そのものに関して、「犯行の手段と動機」⁸⁶⁾の洗練がきわめて重要であって、「面白半分とかつまらぬ腹立ち」⁸⁷⁾などは必然性のない動機として厳に排除されねばならない。総じて、そこでは、「新聞で報道される殺人とは違う」⁸⁸⁾作られた面白さが要求されるのだ。だが Störzer の犯罪は、こうした面白い「殺人事件」であるための基本的要件をことごとく踏み外している。もっと直截に言えば、それは、「新聞で報道される殺人」に、現実起こりうる殺人に実によく似ている。

ここまでくれば明らかだろう。作者は、読者に面白い殺人事件への誤まった関心を喚起しさんざん焦らしたその挙句に、面白く作られた「殺人」の代りに、実際のものに近い、そのかぎりですらつまらない「殺人」を意図的に差し出しているのだ。読者は意外な結末に啞然とすることだろう。もちろん、ここで読者が味わねばならない「意外性」は、通常のように事件の「非日常性」にではなく、全く逆に、期待に反くそのあまりの「日常性」に起因していよう。だが、これも、一風変わったどんでん返しには違はなく、その際立った特徴は、それが

84) 以上の事実経過そのものは S. 190-193.

85) H. ヘイクラフト編、鈴木幸夫訳編『推理小説の美学』(1974年研究社) 101頁。

86) 上掲書103頁。

87) 同上

88) 上掲書101頁。

Handlung そのものの意外な結末に基づくものではなく、急激な対象喪失による読者の「関心」の失速と頓挫という、この小説に取り込まれた読者の関心のドラマにおける皮肉な結末として生じている点にある。

こうして、絶えず増幅させられてきた読者の「事件への関心」は、ものみごとに肩すかしを食らい、そこに差し出された日常的現実には Desillusion を味わう。そこで読者は、かくまでみごとに騙されてしまったからには、作中人物たちや彼らの織り成す Handlung をも打って一丸とする作品全体が、今成就された苦い「誤読」に与みしていたにちがいないと認定せざるをえない。そして読者は、ここに至るまで自分を巧みに誘動してきた「誤読のメカニズム」と、作者がそれによって投げ掛けようとしている「謎」の意味について考え始めるにちがいない。この点にまで思い及んだ読者には、同様に Stopfkuchen による事件の「真相暴露」を聞き終えた Eduard と Meta が、今では半ば作中人物であり、また半ば自らへの「謎掛け」の一翼を担う作家の具でもある胡散臭い存在に見え始めているだろう。また、Stopfkuchen と別れた後に Eduard が巡らしている謎めいた省察は、Stopfkuchen の言動を中心とする作品全体の内包する「謎掛け」への単なるヒントのようにはしか思えないだろう。作者の敷設した《Retardieren → Desillusionieren》という誤読の軌道は、こうして、読者の Desillusion とそれによる作者の Schikanieren の目論みの成就という目的地に達した。作者は去り、読者は「謎」の山とともに一人取り残される。

(つづく)